066 運動会ことはじめ

「運動会」という言葉から連想される思い出は種々さまざまであろう。たとえば、昭和二十〜三十年代の本学卒業生の多くは「後楽園スタジアム」（現東京ドーム）や「神宮外苑競技場」（現国立競技場）で盛大に催された体育祭を思い起こすのではないだろうか。大学全体の学事として開催された当時の体育祭は、学生にとって体育講義の単位修得という切実な一面を有していたことが、学員の方々の思い出話の中にしばしば登場している。

しかしながら、本学においてこのような運動会がいつ頃から始められたのかという点については、意外と知られていない。

英吉利法律学校が創立された頃には、かなりの私立学校で運動会が催されていたようである。創立者増島六一郎が校長を兼務していた東京英語学校では、一八八五（明治十八）年十一月に親睦を図ることを目的として運動会が行われ、そのことが『時事新報』に見える。一方、本学に運動会が発足したのは、八六年であろうと思われるが、翌年の『朝野新聞』（八七年十一月十三日）には、英吉利法律学校の生徒約六〇〇人が王子の飛鳥山で綱引き、高飛び、旗奪い等を行うことが報じられている。

また、翌年の十一月二十八日には、同校の生徒たちが午前六時に学校に集合し、小川町通りから水道橋、さらに春日町・本郷元町を経て本郷通り・駒込から運動会場である飛鳥山に向かって整列行進したとの記事もある。この光景は往き交う人々の注目を集めたことであろう。江戸時代から桜の名所として広く知られていた王子の飛鳥山は、当時は遠足や運動会場としてしばしば利用されている。

さて、次に競技種目をみてみよう。午前の部に登場した競技は、長飛び（走り幅跳び）、高飛び（走り高跳び）、竿飛び、背面競争、人馬競争、二人三脚、片脚、小車競争の八種、続く午後の部になると角力、撃剣、綱引き、旗奪い、三百ヤード、五百ヤード、八百ヤード、徒歩競争の八種となっている。

これらの競技の勝利者三人（一等・二等・三等）には賞品として時計、毛布、ステッキ、フランネルの着物、靴下、ハンカチーフ、冬用の帽子、洋紙、鉛筆、革靴、襟巻き、本箱、帯、蝙蝠傘（こうもりがさ）、机懸け、シャツ等さまざまな品が用意されていた。当時の学生にとって、これら賞品はどれ一つとってみてもたいへん魅力的なもので、競技に参加する学生の意欲をさぞかしかきたてたことであろう。

運動会の運営は、当初は創立者の奥田義人や土方寧らが大会委員長となり、講師の中から副委員長、幹事らが選ばれ、それに学生幹事が加わっていた。経費は、学校からの支出と講師、卒業生の寄付金でまかなわれていた。

このようにして始まった本学の運動会は、学生の健康と気晴らしのための戸外運動であったとともに学生・教職員・卒業生が相互交流を行い、親睦を深める場としての役割も担っていたのである。

秋季運動会での仮装（1913年）

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。